
嗅覚の法則

鷹槻れん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嗅覚の法則

【Nコード】

N2340C

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

においを感じられなくなる時ってどんなとき？【注意】BL要素を含みます。【幼なじみシリーズ】関連作品「子供の虚勢」、

From・A

（前書き）

【嗅覚の法則】をお読みになされる前に

BL要素を含んでいます。

苦手な方はご注意下さい（´・ω・｀；）。

BLって何？って思われた方は読まれないほうが無難かと（^^；

「ずっと我慢してたけど……ただなり忠成君の、獣臭いニオイが苦手だったの」

その言葉とともに、俺は半月付き合った彼女に呆気なく振られた。正直、ショックだった。

だって、俺の家に来てそのニオイの元と戯れていた彼女は、とても幸せそうで……。まさかそんなに嫌がっているだなんて思いもよらなかったんだ。

人間、慣れというものがある。だから長年親しんだ自分のニオイには疎くなる。

それは十分承知しているつもりだった。

普段から母親に「あんたの部屋は何とも言えん臭いがするねえ」と言われていた俺は、彼女に会う前は極力身だしなみに気をつけるようにしていた。当然、汗をかいたらシャワーを浴びるぐらいの配慮はしてデートに臨んでいたのだ。それなのに――。

俺は残念ながら自分の汗臭さには気付いても、一緒に暮らしているフェレット――イタチ科の小動物――のニオイにはかなりのところ鈍感になっていたらしい。

フェレットって生き物は、一応に独特のにおいがするから、気をつけていたつもりだったんだけど。

可愛くて堪らないから、かな？

俺には愛フェレ――ニョロ豆――のニオイが全く感じ取れない。

いや、確かにニョロ豆に鼻を押し付けて嗅げば彼の発する体臭は感じ取れるけれど、それだってどちらかといえば「良いにおい」として認識されてしまうのだ。彼女の言うように「獣臭い」においだと認識されることは皆無で。

俺がニョロのニオイを嗅ぐときは、臭いかどうかを確認するためではなく、そこにニョロがいることを感じたいからに他ならない。

それで、なのかも知れない。

衣服についたぐらいの微かな（？）ニヨ口のニオイでは、俺の鼻は察知してくれなくなっていた。

己の嗅覚を感じ取れないニオイの有無を判別することは、正直至難の業だ。

彼女に振られて、長いこと失意のどん底に落ち込んだ俺だったけれど、その間、何だかんだと理由をつけては俺の様子を見に来てくれた、向かい家の幼馴染み——秋連——に、事の顛末を全てぶちまけてみることにした。

思慮深い秋連なら、この先俺がどうしたらいいか、的確に導いてくれそうな気がしたからだ。

このまま青春真っ盛りの高校時代を、色恋沙汰無しで過ごす羽目になるのは何としても避けたかった。

勝手知ったる他人の家。

小さい頃から入り浸ってきた秋連の部屋で、俺は一部始終を打ち明けた。

薄っすらと夕焼けに染まる室内で、薄暗くなってきたことにも頓着しないで俺たちは対峙していた。

学習机に背を向ける格好で、椅子に胡坐をかいた俺を、ベッドに座った秋連がジッと見つめている。

動きやすいように髪を若干短めにカットしている俺と違って、文科系の秋連はホストよろしくうつつとうしげに前髪を垂らしている。

その髪をかき上げながら溜め息を吐くと、秋連はファッションとして掛けている（らしい）伊達眼鏡を外して足を組み直した。

スポーツ量は断然俺の方がこなしているはずなのに、どうしてこいつの方が体格がいいんだろう。

スッと通った鼻梁に、切れ長の目。いつも伊達眼鏡と前髪に隠れていて分かり辛いけれど、秋連はかなり整った顔をしている。

頭だつて俺なんかよりずっと良いし——比べるのもおこがましいくらいだ——、だからと言ってそれを鼻に掛けたりしないところが同性の俺から見ても好感が持てる。

きつと、女の子にも相当人気があるだろうに、何故か浮いた話が出ないのが不思議だった。

まさか、勉強の方が楽しくて恋愛に興味が湧かない、というわけでもなからうに。

彼の長い足を見ながらぼんやりとそんなことを思う俺をよそに、秋連はずっと黙したままだ。

「……忠成、ちよつと、手え、貸せ」

しばし後、思案氣にうつむいていた秋連が、そう言って手を差し伸べてきた。

「ん？ あ、ああ……」

急に破られた沈黙に戸惑いつつ、彼の手に片腕を預けると、秋連は俺の服の袖口に鼻を寄せた。

「……やっぱ臭い？」

五月の下旬。まだ本格的に汗をかくようなシーズンではないけれど、秋連のその仕草に、一瞬風呂入ったつけ？とか思ってしまう。

いや、今はそれよりもフェレ臭のほうの問題か。

そう思い直して恐る恐る問いかけると、

「自分ではどう思うんだ？」

逆に問いかけられた。

秋連の視線に促されるよう、自分の袖口を嗅いでみると、洗剤のニオイにまぎれて微かに俺自身の体臭が感じられた。

「洗剤と、俺のニオイがする」

正直に感じたままを口にする、

「お前の鼻は本当にニョロのニオイだけ除外して嗅ぎ分けるみたいだな。俺には洗剤の香りを押し退けてあいつのにおいが迫ってきたぞ」

苦笑交じりにそう返された。

やっぱり……。

愛フェレの名前をサラリと交えて告げられた言葉に、俺は正直シヨックを受けた。

分かってはいたけれど、明確に言葉にして告げられると、痛いな、と思った。

「どうしよう？ やっぱ俺の鼻、当てになんねえってことだよな？」

「そういうことになるな」

こういうところ、秋連はにべもない。

脇へ避けていた眼鏡を手にして弄びながら、口の端に微笑を浮かべて即答する。

そのセリフにうなだれる俺に、

「嫌なら二ヨ口を誰かにやるとかすりゃ手っ取り早いぜ？」

「それだけは絶対嫌だ！ んなことするぐらいなら恋人なんて要らねえ！」

「……当然だな」

どうやら俺を試したらしい。

先程より口の端に湛えた笑みを濃くして、秋連が呟く。

「分かってんなら言うなよ……っ」

その態度に、ちよつとムツとして吐き捨てると、

「俺の鼻で良けりゃ貸してやるけど？ どうする？」

願ったり叶ったりの提案が成された。

「——ただし」

この付け加えさえないければ――。

「は？ ……すまん。も一回言っっかいて？」

秋連が告げた言葉が理解できなくて、俺は思わず間の抜けた声を出す。

「だから……代わりに俺の恋愛に付き合えと言ったんだ」

吐き捨てるように再度発せられた言葉に、俺の思考回路は一瞬停滞する。

「お、お前の……恋愛？」

秋連のことだからそういうのもそつなくこなせるはずだ、と勝手に思い込んでいた。

だから、まさか俺にそんな相談をしてくるなんて思いもよらなくて――。

「当たり前だ。他人のなんて持ち出しても仕方ないだろ」

でも、眼前の悪友は、真っ直ぐに俺の目を見てしつかりと頷いた。そう、これは夢じゃない。

何度も目をしばたたく俺を見て、秋連が不機嫌そうな顔をする。

「何だ？ 嫌なのか？」

「い、いや、そういうわけじゃっ！ っちゅーか、寧ろむっちゃ関わりてえ！」

面白すぎる！

『悩み？ んなもんあるわけねえだろ。お前はいつもあつちこつち悩み事だらけで大変だな』

そんな雰囲気で、幼い頃から万事において俺なんか足元にも及ばない秀でた才能を発揮していた秋連から恋愛相談を受けるだなんて！ 自分が同じ事で彼に相談を持ちかけていたことすら吹っ飛んでしまうぐらい、それは愉快過ぎる申し出だった。

「じゃあ、付き合っんだな？」

「もちろん！」

真剣な顔をして俺の顔を覗きこんできた秋連に、俺は二つ返事で肯定の意志を伝えた。

「――では、遠慮なく」

途端、ニコツと極上の笑みを浮かべた秋連を、俺はただただポカッと見上げる。

と、次の瞬間――。

いきなり秋連に口付けられて、俺は何が何だか分からなくなった。「ご馳走様」

ニヤリと笑って遠ざかって行く秋連の顔を見詰めながら、己の身

に何が起こったのかを懸命に考える。秋連の顔が、俺の上に落とされていた影が消えてから、俺はやっと正気に戻った。

「お、おまつ、一体何を……っ」

いや、何をされたのかは理解出来ているけれど……何でそんなことされなきゃなんねえんだ！？

混乱しまくる俺を見て、秋連が「何を今更」と呟いてニヤリと笑ってみせた。

「忠成。お前、俺の恋愛に付き合うつて言っただじゃねーか」

言っただ！ ああ、確かに言っただとも！

「でも、それとこれとは関係な……」

「大有りだ」

まだ分からないのか、と呆れた顔を見ると、秋連は

「俺はお前がどんなに汗臭かったとしても……恐らくそうだとは感じ取れねえ」

そう言っただ。

「？……だからっ！ 何でいきなり話が飛ぶんだよ！」

ここへ来てもチンプンカンプンなことを言う秋連に、俺の思考回路は空回りを繰り返す。

余りのことに縫い止められたように身動き出来ないまま、椅子の上から横に立つ秋連を睨み上げる。

「好きになりすぎるとその相手のなおいつてあんまり感じなくなるみたいだな。現にお前はニョロ豆のにおい、感じないだろう？」

勝ち誇ったようにそう言っただ笑う秋連に、俺は何と反論すればいいのか分からなくて――。

ともかくにも恋愛相談に来て、晴れやかな気分で帰れるはずだった友の家を、来たときよりも大きな悩みを抱えて出なければならぬことだけは理解出来た。

あー！ もう！ 俺はこれからどうすればいいっ！？

0
0
7
.
6
.
2
7

E
N
D
2

（後書き）

最後まで読んでくださり有難うございました m ((m
感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2340c/>

嗅覚の法則

2010年10月8日14時52分発行